

イントゥ・ザ・ブルー

2005(平成17)年10月5日鑑賞<東映試写室>

★★★



監督＝ジョン・ストックウェル／出演＝ポール・ウォーカー／ジェシカ・アルバ／スコット・カーン／アシュレー・スコット／ジョシュ・ブローリン／クリス・トロア／タイソン・ベックフォード／ドウウェイン・アドウェイ（20世紀フォックス映画配給／2005年アメリカ映画／110分）

……カリブ海に沈む、何百万ドルの金塊を積んでいるという「伝説の沈没船」はダイバーたちの憧れの的！ そんな海には、怪しげな「ブツ」を満載したまま墜落した飛行機の残骸も……？ 2人の真面目なダイバー（？）と2人のちょっと不謹慎な（？）友人たちを主人公として、バハマの海底を舞台にくり広げられる「お宝」の争奪戦は、ドタバタ風ながらも興味深いもの……？ 主役ダイバーの引き締まった肉体も魅力だが、『ファンタスティック・フォー』（05年）では宇宙服に身を包んでいたその恋人のジェシカ・アルバが、海中で見せるダイバー技術と美しい肢体に要注目！ もっとも、この映画は秋ではなく、真夏の公開がベストだったと思うのだが……？

『ブルークラッシュ』と『イントゥ・ザ・ブルー』との共通点は？

ハワイのオアフ島を舞台として、クラッシュング・ウェイブ（大波）と闘うサーファーたちを主人公に描いた美しい映画が『ブルークラッシュ』（02年）だったが、この『イントゥ・ザ・ブルー』は海の底に眠る（かもしれない）お宝（トレジャー）をハントするため、海に潜るダイバーたちを主人公とし、欲が渦巻く人間模様の中での水中アクションシーンをたっぷり取り入れた娯楽作品。その両者に共通するのは、両者ともサーファーでありダイバーでもあるジョン・ストックウェル監督の映画であるということ。つまり、ジョン・ストックウェル監督にとっては、この2つの映画づくりは、自分の趣味と実益を兼ねたもの……？

注目はジェシカ・アルバの……？

この映画で、ダイバーとしてのしっかりした技術と美しい肢体を披露するのは、サム・ニコルソンに扮するジェシカ・アルバ。2005年の今年、彼女は『ファンタスティック・フォー（超能力ユニット）』と『シン・シティ』に続いて、この『イントゥ・ザ・ブルー』でも、主役としての登場だ。『ファンタスティック・フォー』では、宇宙服に身を包んだジェシカ・アルバだったが、この映画はバハマの海（海中）を舞台としたダイバーたちのお宝探しの物語だから、その「制服」は、当然ちっちゃな水着。したがって、ダイバー技術も1つの注目点だが、スケベおやじとしてはそれ以上に、彼女の美しい肢体に注目！

主人公のジャレッドは真面目なフリーダイバー

この映画の主人公ジャレッド・コール（ポール・ウォーカー）は、贅肉が全くない研ぎ澄まされた、男でもホレボレとするような肉体を持つフリーダイバーだが、あまり世渡りは上手ではない青年のよう。彼は一方では、バハマの海の底に眠っているという何百万ドルの金塊を積んだ「伝説の沈没船」を求めている。しかし、そのトレジャー（宝物）・ハンターがダイブするために必要な船として彼が現実を持っているのは、水漏れのするオンボロ船……。これではちょっと……？

ジャレッドのライバルであるデレックは……？

このジャレッドの昔からのライバルは、デレック・ベーツ（ジョシュ・ブローリン）。今日もオンボロ船の修理に精を出しているジャレッドと違って、このデレックは既に大きな船を所有しており、たくさんのダイバーたちを雇って幅広く儲けている様子。彼が言うように、お宝に近づくには夢はもちろん必要だが、最後は資金力……？

恋人のサムも真面目なサメのハンドラー

前述のジェシカ・アルバ扮するサムは、美しい海を目当てにした観光客を相手

として、サメのハンドラーをしながら、ジャレッドとの結婚を夢見ている真面目な女性。その美しい姿カタチに似合わず(?)、住んでいるところもオンボロのトレーラーといったって地味……？

こんな真面目な2人が、真面目に働いて結婚し、老人になるまで幸せに暮らしましたとき、では映画にならない！　そこで引っかき回し役(?)として登場するのが、次に紹介するジャレッドの幼なじみのブライス・ダン（スコット・カーン）……。

ジャレッドの幼なじみのブライスは成功した弁護士だが……？

ブライスはニューヨークで大成功を収めている弁護士で、今日は恋人(?)のアマンダ・コリンズ（アシュレー・スコット）とともに、ジャレッドとサムが住むジャマイカ島に遊びに来た。もちろん、ジャレッドもサムもこの2人を大歓迎。地元で真面目に働きながらも、うだつが上がらないジャレッドに対して、ブライスはある事件の報酬としてこの島にある美しく立派な邸宅と贅沢なヨットを買っていた。

素直にこんな事態を喜び受け入れたジャレッドとサムは、このヨットをパーティー・ボートとして島の周辺を自由にダイビング……。もちろん、ブライスとアマンダはダイビングのライセンスを持っていないが、単なる遊び程度ならライセンスなどなくともオーケー……？

ブライスの新恋人アマンダは……？

このアマンダをブライスの恋人と言ってよいのかどうかは少し微妙。なぜなら、目下ラブラブの2人を出迎えたジャレッドとサムは、ほんのちょっと前にはブライスの恋人として、別の名前を聞かされていたのだから……？　このちょっとした手違いは、まだ知り合って5日目というブライスの説明によってなるほどと納得……？　それほど、このやり手弁護士のブライスは女好きのプレイボーイというわけだが、そんな男に引っかかった女も、ちょっとクセがあるのでは……？　そんなところが、この映画のメインストーリーである宝探しの別線として面白い男女の構図かも……？

「伝説の沈没船」と「墜落した飛行機」をダブル発見！

ピギナズ・ラックとはよく言ったもので、あれほど夢を求めて海に潜り続けていた地元のダイバーであるジャレッドが発見できなかった「伝説の沈没船」を、4人が遊び感覚でダイビングしている時に発見！ もちろんこれが発見したのは、素人のブライスではなく、玄人のジャレッドだが、その発見にジャレッドとサムだけではなく、ブライスとアマンダも大興奮。

さらに、その周辺を調べ回ったジャレッドの努力によって、「墜落した飛行機」の残骸を発見したところ、何とその中には大量のコカインが……。こりゃエラいことだ。

さてここで、4人が考えたことは……。そして4人のとった行動は……？

相違する人間性！ そして分裂する方針！

素朴で単純な発想しかできないのが地元民のジャレッドとサム。これに対して、さすが若いとはいえニューヨークで数々の修羅場を経験してきた弁護士ブライスは、事態の飲み込みが早いし、計算の仕方、方針の立て方も早い……。「伝説の沈没船」には何百万ドルの金塊が積まれているはずだが、その調査や引揚げ作業には巨額の資金が必要。そのためには、あの飛行機の残骸の中にあつた大量のコカインを売りさばけばよい……。

そのようにブライスが考えたのは当然で、きわめて合理的。多分私だって同じように考えるはず……？

幼なじみの友人であっても、その人間性が相違するのは当然。そして、こんな特殊な状況になれば、その人間性の相違によって行動方針が分裂するのもやむをえない。しかし、そこから生まれてくるものは……？

フルは誰……？

大量のコカインを積んだ飛行機が、ジャマイカ島のリゾート地の近くで墜落したという情報は、既にそのコカイン関係者（？）たちに知れ渡っていたのは当然。したがって、ジャレッドやブライスがこれが発見したのはホントに偶然だが、既

にそれを捜すために、大量の怪しげな人間たちが動いていることも容易に想定できるはず。

そのややこしい人間関係や、それぞれの動き・狙いは映画を観てのお楽しみだが、ワル役は地元のナイトクラブのオーナーであるプリモ（タイソン・ベックフォード）だと考えればいだろう。

このプリモにとって、ブライスは立案した計画は当然敵対する、ヤバイもの。しかし、ウラの世界は狭いもので、ジャレッドに内緒でブライスがコカインを売りさばこうとした相手は、そのコカインの元の所有者だったから、コトは段々ややこしくなってきた……？

こうなれば、夢の宝探しという範疇を越えて、現実的な欲が絡み、生命の危険さえ伴う困難な宝探しになってくるのは当然。現にジャレッドとサムの手勝手な行動のために、ブライスはプリモの命令に従って、そのコカインの引揚げの作業をやらなければならないことに……。

そりゃ、恋人サムの身に危険が及ぶとなれば、ジャレッドもそれに従わざるをえないのは当然。さて、ここからは、ジャレッドとサムの組と、ブライスとアマンダの組、そしてワル役のプリモの組、さらにこれではどうにもならないと判断して、サムが駆け込んだ友人である地元の警官ロイ（ドゥウェイン・アドウェイ）も巻き込んでの、生々しいお宝争奪戦が……？

水中での格闘戦は……？

この映画の売りは、美しい水中特撮シーンだが、ストーリー構成上この映画には美しいだけではなく、激しくかつ血生臭い水中戦闘シーンがたくさん登場する。そして私にはよくわからないが、安全なサメと危険なサメの2種類があるらしく、前半は安全ザメのオンパレードで美しい水中ダイビングが連続するが、後半は危険ザメがキバをむき、人間の足や腕そして頭を食いちぎりにくるからちょっと恐い……？

そのうえ、「地上戦」であれば顔の見分けがすぐにつくものの、「水中戦」になると、大きな水中メガネや酸素ボンベなど必要不可欠な装備がついているため、誰が誰やらわかりにくくなってしまうから不便に……？

さらには、こんな重装備で、こんなに自由に身体を動かすことがホントにできるの、という疑問も……。

ホントはこれが撮りたかっただけ……？

この映画は、正義と悪（？）が入り乱れて争うようにうまくストーリーをつくりあげているが、最後はちょっとマンガ的とも言えるような超ハッピーな結末に。これではちょっと甘すぎるのでは、と思わなくもないが、エンドロールの字幕が流れている間、スクリーン上に登場する美しい海中でのジャレッドとサムによるダイビングシーンを観ていると、ああ、この映画は結局この美しいシーンを撮りたかっただけなのだ、と妙に納得……。

もちろん2時間近くもそんなシーンを流しただけでは映画にならないから、この映画はジャレッドとサムに対置されるブライスとアマンダ、そして悪役や警察官などのキャラをうまく配置している。

そして、そのうえで、「伝説の沈没船」内の金塊や「墜落した飛行機」内のコカインなど、人間の欲望をうまく刺激するネタをストーリー上に散りばめることによって、欲にうごめく人間模様をうまく表現……？

なぜ11月に公開？

この映画は、『ブルークラッシュ』(02年)と同様、当然夏向きの映画。地球温暖化が進む中、今年も日本では暑い夏が続いたが、さすがに9月に入ると海水浴やダイビングというイメージはなくなってしまうから、この映画に刺激されても、翌日ダイビング旅行というわけにはいかないはず。その意味で、この映画は遅くとも8月末まで、できれば7～8月に上映するのがベスト。それが、なぜ11月公開となってしまったのだろうか……？

2005(平成17)年10月6日記